

自慢の言語表現の語用論的分析

中 内 遥

1. はじめに

橋元 (1992) は、日本に来た外国人留学生が日本語の意味自体は理解しているにも関わらず、発話の意図の理解において誤解を生じるケースがあると指摘した。以下は橋元 (1992) が 1990 年に東京大学に通う外国人留学生に行った調査の中で「日本人と話していて困ったこと」という質問から得た回答を引用したものである。

多くの欧米系の留学生から「日本人ははっきり自分の意見を言わない」「省略が多い」「ことばと考えていることとにずれがある」「ちょっと、少し、ええ、などのことばの意味があいまい」「目上・目下のことばの使い分けが難しい」等の回答を得、また中国、韓国の留学生からは「いつか遊びに来て、といわれて、ずっと誘いを待っていたが連絡がなかった」「依頼などで、何をしてほしいのか、よくわからない。単なる質問としてとらえてしまいがち」「たばこはありますか、のように、もののある・なしだけで依頼になるのがわからなかった」「その本はおもしろそうですね、が貸してという意味になるのがわからない」、等いわゆる言外の意味を取り損ねたケースに言及する回答をいくつか得た。(橋元 1992 : 92-93)

このように、日本語母語話者が共有している言語運用ルールが非日本語母語話者とのコミュニケーション・ギャップを招くことがある。本研究ではこのようなコミュニケーション・ギャップを生じ得る発話行為のひとつとして「自慢」を取り上げる。「自慢」とは自らを褒め、他人に誇るという発話行為であるが、日本語母語話者間で「私はすごいです」と直接的に誇ることはあまり考えられない。「自分が誇ることで相手を不快にさせるのではないか」という対人配慮的な面や、「誇る行為を行うことによって自分の品位を下げってしまうのではないか」という体裁的な面により、直接的な「自慢」行為を避けるのが一般的だと考えられる。では、日常会話の中で

「自慢」が全く現れないかと言えばそうではない。「自慢」ということばが存在していることからわかるように、それに相当する言語行為も存在しているはずである。直接的な「自慢」が現れにくいのであれば、日本語母語話者は婉曲的な表現を用いて「自慢」を遂行しているということである。

しかしながら、これまでの研究で「自慢」を発話行為として類型化している例は少なく、「日本語母語話者の自慢」として具体的な表現や定型的な談話展開の例を挙げることも行われてきていない。本研究では、まず「自慢」と似た対人行為として「依頼」を参考にし、語用論的な観点から「自慢」の認定基準を検討する。その後、ロールプレイ会話調査によって収集した自慢談話を観察してその特徴を発話機能の観点から類型化し、自慢の言語表現の分析の枠組みを整える。

2. 研究の枠組み

2.1 自慢行為の認定基準

釜田 (2017) は、会話上の期待から「自慢」を以下のように説明している。

本研究は、自分の能力などに留まらず、自分が所有しているものや、自分と関係がある・あった出来事について誇っている場合なども「自慢」と捉える。本研究において「自慢を語る」ことは「自分のことや、自分に関係のあることを他人に誇ることで、賞賛されることを期待している語り」とする。

(釜田 2017 : 53)

以下は、釜田 (2017) の挙げる「自慢」の例である。

(1) 昨日、第一希望だった会社から内定もらったの

市川 (2019) は「自慢」ではなく「マウンティング」という用語を用いているが、発話意図などが「自慢」と類似しているためここでも参考にする。以下は市川 (2019) のマウンティングの説明の引用である。

相対的に優位な立場にいると思っている参加者 A が自尊心を満たすために、自身の優位性を明示・暗示的に参加者 B に伝える言語行為である。また、参

与者 B が下に格付けされたと受け取った場合もこれに含める。

(市川 2019 : 3)

釜田 (2017) と市川 (2019) により、本研究では、「自慢」とは「自慢の語り手が自分を褒めて自慢の受け手に誇る」うえに、「自慢の語り手が自分の優位性を自慢の受け手に認められ、その優位性を認めたことが分かる賞賛などの反応を期待している」行為とみなす。つまり、本研究で分析対象とする「自慢談話」とは、自慢の受け手の反応までを含むものとする。自慢の語り手は受け手に何らかの「自慢の内容を認めた」反応を期待しているが、それは「賞賛」のような友好的なものであるとは限らず、自慢の語り手に対して嫉妬をしたり、嫌悪感を抱いたりすれば嫌味で返す、返事をしないなどの非友好的な反応があることも考えられる。本研究ではこのような、受け手が語り手の優位性の誇示を受け取ったとみられる反応があったものを「自慢の成立」とし、自慢が成立したものを「自慢談話」として分析対象とする。

「自慢」の語用論的な側面を捉えるために、まず、蒲谷・川口・坂本 (1998) の行動展開表現の類型を参考にする。行動展開表現は、「だれが『行動』するのか」「だれがその『行動』の『決定権』を持つのか」「だれがその『行動』によって『利益』を受けるのか」という点で類型化されている (蒲谷・川口・坂本 (1998))。以下は、蒲谷・川口・坂本 (1998) の挙げる行動展開表現「依頼表現」の例である。

(2) すみません。水を一杯いただけますか。

(2) は「相手」が「水を一杯持って来る」という「行動」をし、その「行動」をすることを「相手」が「決定」し、それにより「自分」が「利益」を受ける行動展開表現となる。蒲谷・川口・坂本 (1998) はこれらをそれぞれ「行動」、「決定権」、「利益」という観点としてまとめており、「依頼表現」を以下のように示している。

(I) 依頼表現

「行動」 = 相手、「決定権」 = 相手、「利益」 = 自分

また、山岡 (2008) は依頼の聞き手の行為を《協力》とし、《依頼》の発話機能を整理した。以下は、《依頼》の発話機能である。

(Ⅱ)《依頼》・《協力》

参与者：《依頼》の話者 = 参与者 A

《協力》の話者 = 意図されている行為者 = 参与者 B

目的：参与者 A の利益のために、参与者 B がある行為を行うこと

参与者 B の行為をめぐる語用論的条件：

- ① [実行可能]、② [非自明]、③ [自己権限]、④ [参与者 A への与益]、
- ⑤ [参与者 A の欲求]

発話の参与者を A・B とする場合、《要求》をする側を《依頼》の話者 = 参与者 A とし、《付与》をする側を《協力》の話者 = 参与者 B としている。《依頼》の目的は参与者 A の利益のために、参与者 B がある行為を行うことである。参与者 B の行為をめぐる語用論的条件として、山岡（2008）は5つ条件をあげた。一つ目は当該行為が参与者 B の意志によってなし得る行為であるという [実行可能] である。二つ目は通常の事態の進行において参与者 B が当該行為を実行するのは自明ではないことという [非自明] である。三つ目は参与者 B による当該行為の実行は参与者 B 自身の権限に基づく [自己権限] というものである。つまり、《依頼》には強制力はなく、《協力》をするかどうかは任意性があるということである。四つ目は参与者 B による当該行為の実行は参与者 A への与益であるという [参与者 A への利益] である。五つ目は参与者 B が当該行為を実行することを参与者 A が欲しているという [参与者 A の欲求] である。

「意図されている行為者」は行動展開表現の「行動」の観点、[自己権限] は「決定権」の観点、「目的」や [参与者 A への与益] は「利益」の観点での分類と同じと言えるだろう。そこに [実行可能]、[非自明]、[参与者 A の欲求] を加えて、《依頼》を分類している。

これに《自慢》を当てはめて考えてみる。まず、《要求》をする側を《自慢》の話者 = 参与者 A とするとき、《付与》をする側を《承認》の話者 = 参与者 B とする。《自慢》の目的は参与者 A の利益のために、参与者 B が自慢の承認を行うことである。《承認》は参与者 B の意志によってなし得る行為である ([実行可能])。参与者 A の《自慢》を受けて、参与者 B が必ず《承認》を実行するとは限らない ([非自明])。《承認》は参与者 B が任意で行うもので、強制されていない ([自己権限])。参与者 B による《承認》の実行は参与者 A への与益である ([参与者 A への利益])。参与者 B が《承

認》を実行することを参与者 A が欲している（〔参与者 A の欲求〕）。

以上の参与者 A・B の関係、目的、語用論的条件の点から、《依頼》と《自慢》は類似していると言える。《依頼》・《協力》に《自慢》・《承認》を当てはめて発話機能を整理する。以下は、《自慢》の発話機能である。

（Ⅲ）《自慢》・《承認》

参与者：《自慢》の話者 = 参与者 A

《承認》の話者 = 意図されている行為者 = 参与者 B

目的：参与者 A の利益のために、参与者 B が自慢の承認を行うこと

参与者 B の行為をめぐる語用論的条件：

- ① [実行可能]、② [非自明]、③ [自己権限]、④ [参与者 A への与益]、
- ⑤ [参与者 A の欲求]

本研究では、以上の条件を備えたものを「自慢」とみなす。

2.2 自慢に関する研究

戸江（2008）は、同年齢の子供を持つ母親たちの会話で、聞き手の回答が相手に自慢として受け取られる可能性について述べている。

ここで問題なのは、どうして子供がオムツを自分でもってくるなどという一見すばらしいことが、言いづらそうな形をとって述べられているのか、という点である。

この問題を考えるに当たっては、次の点を押さえておく必要がある。それは、この会話をしているのが、同年齢の子供をもつ母親たちだということである。母親たちにとって、子供の発達上の問題はきわめて敏感な話題といえる。本稿で取り上げるデータはみな、このような問題にかかわっている。データ 1,3 では睡眠の悩みが、データ 2,4 ではトイレトレーニングの悩みが語られている。

では、これらの話題が母親たちにとってどのように微妙な問題かというと、それは自分の子供の発達状況について語ることが、他の母親にとっては自慢として聞こえてしまう場合があるからである。（中略）ここでは、同年齢の子供をもつ小野と青山が話している。小野が自分の娘（ノリコ）は靴を自分ではなくことができるようになったと述べると（01-02）、青山は「えもう靴はける

んだー」とノリコの成長ぶりに驚いている (03)。小野は続けて、どんな靴をはけるのかを詳しく説明する (04、06-07)。これに対して青山は、再び「進んでるんやーちっこいのも」とノリコの成長への関心を示している (09)。小野がさらに、ノリコがゴミを捨てに行ってくれるという話を披露すると (27、29-30)、青山は「うち進化してなあい」と自分の子供の成長の遅れについて愚痴をこぼしている (32)。

以上のように、小野がノリコの成長 (靴を自分ではける、ゴミを捨てに行く) を語ることが、結果的に、同じ年齢の子供をもつ青山に、自分の子供の発達の遅れを感じさせることになっている。つまり小野の話は、青山に対する自慢となっているように思える。

(戸江 2008 : 140-141)

戸江 (2008) は、同年齢の子供を持つ母親同士の会話では、自分の子供の成長について語るとき、それが相手との比較になり、結果として自慢のように聞こえることがあると指摘している。つまり、会話の参加者同士の立場が近く、相手と自分を比較しやすい場合、「プラスの体験の報告」は「自慢」と受け取られやすいということである。

釜田 (2017) も同様に、(1) のような自慢は、例えば両親に語れば喜ばしい報告となるが、内定を1社も得ていない友人に語れば不快に感じさせる可能性があるとは指摘している。これも「自分と両親」、「自分と友人」という立場の違いによって引き起こされる問題であると考えられる。

2.3 調査概要

調査目的は、《自慢》という発話行為の特徴を観察し、分析することである。

本研究では、日本語母語話者同士の会話を分析対象とする。そのため、日本の大学の学部生を対象とし、調査者 (筆者) との会話を収集した。また、同性同士の会話に限定するため、調査者の性別に合わせて親しい間柄の女性のみを対象とし、10組の会話を調査した。語り手の記号は S1 ~ S10 とし、受け手の記号は H とする。

調査方法は、オンラインミーティングアプリ Zoom を用いて、あらかじめ会話の場面状況を用意し、ロールプレイ会話の音声収録と、そのロールプレイ会話についてのフォローアップ・インタビューを行った。用意した場面設定の中では、調査対象者は「自慢をする語り手」、調査者は「自慢を引き起こす / 自慢へ反応する受け手」

という役割で統一されている。調査者は、場面によって語り手に対して肯定的な反応（《賞賛》など）と否定的な反応（《無反応》など）をランダムで行う。調査対象者には調査者がどのような反応をするのかは伏せている。

ロールプレイ会話には、戸江（2008）と釜田（2017）の主張を参考に、語り手にとって良い経験の報告であること、語り手と聞き手の立場に大きく違いがなく、互いに共感しやすいものであることを意識して、2つの場面を設定した。

指示書では、その時の語り手自身、場面状況の設定に加え、語り手の会話上の期待も示した。ロールプレイ会話をする際、「あなたの期待」を意識するように説明し、「自慢」の意図を持った発話が現れるようにした。

場面1 年確自慢

あなた：以前、居酒屋で注文しようとした時、店員に「未成年の方にはお酒を提供できません」と断られた。自分のことを童顔だと思ったことがないので、驚くと共に嬉しいと思った。

状況：居酒屋で同い年の友人と2人で会話をしている。この店は客全員に年齢確認をする店だったので、二人とも身分証を提示した。今の会話は、そのことが話題になっている。

あなたの期待：自分が実年齢より若々しく見えることを認めてもらいたい。

場面2 内定自慢

あなた：大学4回生で、就活をしている。先日、第一志望の企業から内定を得た。

状況：大学の友人と2人で会話をしている。友人も同じく就職活動をしている。

あなたの期待：自分の就職活動がうまくいったことを、友人にも認めてもらいたい。

この指示書では、《自慢》の語り手（参与者S）に対しての設定のみであるが、《自慢》の受け手（参与者H）は全会話共通して「場面1：成人してから確認されずに酒を提供されるようになったことを寂しく思っている」、「場面2：最近第一志望の企業に落ちた。一旦止めていた就職活動を再開するのが不安である」という設定で会話を進める。

上記の2つの場面は、それぞれ「自慢しやすさ」にある程度差が生まれる話題にしている。今回、「自慢しやすい場面」として設定したのは場面1の年確自慢、「自慢しにくい場面」として設定したのは場面2の内定自慢である。両場面の違いは2

つある。

1つ目は経験の有無によって、今後の立場に差が生まれやすいかどうかという違いである。居酒屋で若く見られたという報告は確かに嬉しいものではあるが、その出来事を経験した語り手と、経験しなかった聞き手との立場の差が生まれにくい。しかし、第一志望の企業に入社できたという報告は人生に関わってくる出来事であるため、うまくいっていない聞き手に語るには、「自慢しにくい」場面だと言えるだろう。

2つ目は参与者同士が敵対関係であるかどうかである。参与者Sが年齢確認されることに参与者Hの存在はほとんど関係ないものである。今回設定した場面だと、そもそも参与者Sが年齢確認されたのは参与者Hとは関係のない過去の出来事としているので、よりその傾向は強い。一方、同じ就活生同士となると、参与者同士で蹴落とし合う関係になる可能性がある。参与者Hに対して、全く関係ない場面でのプラスの経験を語るより、当事者同士で起こったプラスの経験のほうが「自慢しにくい」場面となる。

3. 自慢談話の表現の特徴

3.1 自慢のコミュニケーション機能

自慢談話で現れた表現を分類するため、熊谷・篠崎（2006）のコミュニケーション機能の分類を参考にした。熊谷・篠崎（2006）は、依頼場面での発話を相手に対する働きかけの機能を担う最小部分の単位である「機能的要素」を働きかけの内容によって分類し、その上位分類を「コミュニケーション機能」とした。以下は、熊谷・篠崎（2006）の「依頼談話」のコミュニケーション機能の一覧とその例である。

表1 コミュニケーション機能の一覧（依頼談話）

	荷物預け	往診	釣銭確認
きりだし	スミマセン	タノンデーデスカ	オネガイシタイデスカ
状況説明	ヨソエマワリマスカラ	急病人ガイルノデ	サッキ買物シタンデスケド
効果的補強	アトデトリニキマス	ウゴケナイカラ	レシートコレナンデスケドー
行動の促し	アズカッテクダサイ	キテイタダケマスカ	タシカメテモラエマスカ
対人配慮	スミマセンガ	ヤブンオソレイリマスカ	ワタシノ計算チガイナノカドーナノカ
その他	ココエオイトクカラカ	ナンジゴロコラレマス	マダオ財布ニオツリモイレテマセンシ

これを参考に、本研究では自慢談話を構成する個々の発話の機能を《きりだし》《状況説明》《積極的な効果的補強》《消極的な効果的補強》《承認の促し》《対人配慮》の6つに分類した。自慢行為は他の発話行為と比較しても、特に文脈に依存するものであるため、以下に、調査によって採集された自慢談話で現れた各コミュニケーション機能の代表例を前部分の文脈と共に示す。発話に複数のコミュニケーション機能が含まれている場合は、該当箇所を下線で示す。尚、コミュニケーション機能は、発話を意味のまとまりごとに区切り、その区切りごとに判断している。

(3) 《きりだし》：内定自慢 (S1)

05H：なんか、さー、就活とかってさー、どんな感じ↑。

06S1：なんか、まわり、さー、あんま皆言わんやん。

07H：そー。

08S1：会えへん状況やささ。

09H：そやねーん、でもめっちゃ気になってー。

10S1：そー、言わんほうがいいんかなって思ってたんだけど。なんか一応、第一志望のところは、いけてるな。

本調査では、会話の中で自慢したい内容の年齢確認や内定話題が受け手から提供されるため、「注目喚起や話題をきりだすもの」ではなく、「自分の自慢を始めるもの」を《きりだし》としている。また、本調査では《きりだし》と分類したものは例として挙げたものも含めて2件であった。どちらも内定自慢場面で現れているが、今回は他のコミュニケーション機能と出現数での比較は行わない。

(4) 《状況説明》：年確自慢 (S5)

06S5：こないだ、こないだ私だけ年確されたことあった。

07H：ほんまに↑。

08S5：なんか [笑]。

09H：マジ↑。

10S5：マジで、ちょっとびっくりした [笑] なんか。そうなんやっけ、ダンス行って撮影してそんまま、帰り際、あ、Xあるし行こうみたいな感じでそんまま入って、まあ、まわり、みんな、一応20歳超えてた人やったからー、まあ年確されへんでいいよなーって感じで行ったら、

なんか、私だけちょっと、なんか見せてくれませんかって言われて、あれっ↑ [笑] マジで↑みたいな。ことは1回ある。

本調査では、「年齢確認をされた」「第一志望の企業から内定をもらった」という「自慢したい経験をしたときの状況を共有する為に情報を提供するもの」を《状況説明》としている。

(5) 《積極的な効果的補強》：年確自慢 (S9)

28S9：お店によるけど年確されるかも。

29H：えまじか。それなに、なんかこ、ここの店みたいにさ、みんなに年確するような店とか。

30S9：じゃないと思うねんけどー。されると思う。見えるんかな、19とか、うーん。 [笑]。

本調査では、「プラスの方向での疑問や推測、感想、感情を表したり、相手からの賞賛などの反応を肯定したりすることで、相手の《承認》を引き出そうとするもの」を《積極的な効果的補強》をする。代表例として選んだものは、「プラスの方向での疑問・推測」に該当するものとして挙げた。

(6) 《消極的な効果的補強》：内定自慢 (S7)

21H：ま、でも、あれよなー、うーんほんまに、いやでも、いや偉いわ、Sはちゃんとばっちり1番行きたいとこってあれやもんななんか。あれやったなー、なんか、うーんなんかすごい、がんばったもんなS。

22S7：ううん、全然。

23H：いやいやいや。

24S7：いやー、運よあんなん。

本調査では、「マイナスの方向での疑問や推測、感想、感情を表したり、自慢したい内容によって起こったことを悪い経験として語ったり、自分を控えめに表したりし、それを相手に否定されることで、相手の《承認》を引き出そうとするもの」を《消極的な効果的補強》をする。代表例として選んだものは、「自分を控えめに表すもの」に該当するものとして挙げた。

(7) 《承認の促し》：年確自慢 (S6)

01H：あれやな、なんかさー、さっき年確されたからさ、久々の年確と思って、テンション上がったけど、ここの店ってお酒頼む人みんなに年確するみたいやな。なんかおかしいと思ってんな。

02S6：そうみたいやね。

03H：なんかあれやな、久しぶりにこうやって人と会って飲み会するわ。

04S6：うん。もうめっちゃ久しぶり。いつぶりって感じや。

05H：ほんまにいつぶりって感じよな。半年以上もう飲み会とか行ってないから。

06S6：うん、ほんまに。でも前、なんか違う店でも普通に、年確とかされた。されてんな [笑]。

(8) 《承認の促し》：内定自慢 (S4)

23H：え、どうなの？もう就活さあ、終わり？そこで。

24S4：そやなあ。一応もう第一志望で受けたとこやから終えようかなと思ってる。

本調査では、「自分を褒めたり、認められたい内容を提示したり、自慢したい内容によって起こったことをよい経験として語る表現を用いて、相手から期待通りの反応を引き出そうとするもの」を《承認の促し》とする。

(9) 《対人配慮》：内定自慢 (S8)

10S8：えーなんかうちはそのパターンなかったかもしれん。後半なって連絡が遅くなったってことやんな。なんか、最初っからいい感じで進んで、結構その、うちはその内定、第一志望のとももらえてんけど、その時は、なんかポンポンっていうか、リズムよく、え難しいな。もしかしたら電話してみるとかもいいかもな。

11H：もしかしたら忘れられてるかもしれへんから、こっちからちょっと聞いてみたほうがいいんかもしれへんよな。

12S8：なんか、Hの喋り方とかめっちゃ好きやし、自信あるのとか伝わってくるし、堂々と喋ってる、のって絶対人事に伝わってると思うし、

いけると思うねんけどなー。でも、わかりにくいかもしれへん。

本調査では、「相手からの賞賛を否定したり、謝罪を伝えたり、自分の自慢から話題を転換したりすることで、相手を気遣い、自慢を薄めるもの」を《対人配慮》とする。代表例として選んだものは、「自分の自慢から話題を転換しているもの」に該当するものとして挙げた。

調査方法で、「場面によって語り手の期待に沿った反応（《賞賛》）と期待に添わない反応（《無反応》）をランダムで行う」とあったが、聞き手の反応別に分析したところ、コミュニケーション機能の件数に特徴が見られなかったため、今回は取り扱わないものとする。

3.2 自慢の「強め」と「薄め」

場面1（年確自慢）と場面2（内定自慢）の「自慢しやすさ」に差がある場面では、自慢談話内のコミュニケーション機能の現れ方にも差が生じると考えられる。そこで、調査結果をまとめ、自慢しやすい場面で多く現れたコミュニケーション機能は自慢したい内容が目立つようにする「自慢を強める」効果があり、自慢しにくい場面で多く現れたコミュニケーション機能は自慢したい内容が目立たないようにする「自慢を薄める」効果があるとし、分析、考察をする。

図1・2では各参与者の場面によるコミュニケーション機能の発話件数をグラフにして示す。

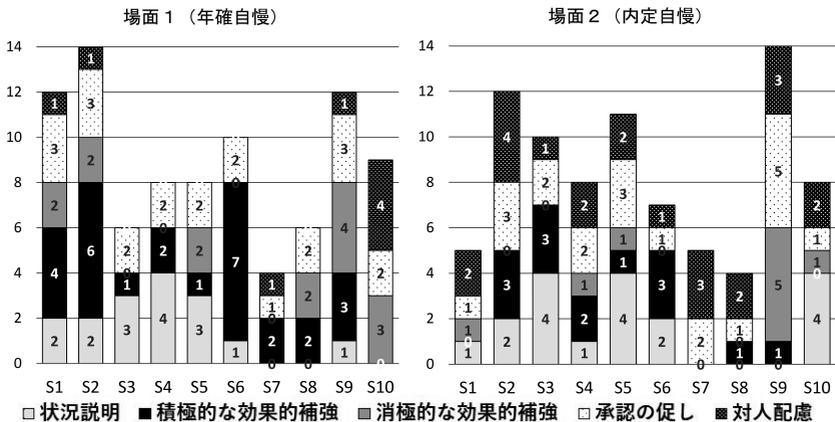


図1 場面1・場面2のコミュニケーション機能の発話件数

場面1（年確自慢）と場面2（内定自慢）の結果を比較してみると、《承認の促し》と《状況説明》は各場面に大きな差が現れず、《積極的な効果的補強》や《消極的な効果的補強》、《対人配慮》に差が見られることがわかる。以下に、各コミュニケーション機能の出現率を用いて特徴を述べていく。全ての割合は小数点第一位以下を切り捨てて四捨五入したものをを用いる。

《承認の促し》は全コミュニケーション機能中、場面1（年確自慢）で25%、場面2（内定自慢）でも25%現れた。調査対象者個別にみても1～3件現れるのがほとんどだった。今回の調査では、ロールプレイ会話の指示で「自慢をするように」とあったため、このような結果になったと思われる。しかし、自慢しやすい場面であるはずの場面1（年確自慢）で《承認の促し》が多くないことは想定外である。このことから、「自慢談話」では《承認の促し》以外で自慢を強めたり、薄めたりすることがわかる。

《状況説明》も場面1（年確自慢）では18%、場面2（内定自慢）では21%と大差なかった。場面2（内定自慢）のほうで若干多いのは、当時の状況をよく説明し、受け手に共感してもらうことで、互いの立場の差を広げないようにしようとするからではないかと考えられる。調査対象者別に見ると、S7やS8は両場面で、S9やS10はどちらかの場面で《状況説明》を用いていないため、語り手によって用いるかどうかを選択していると言える。

《積極的な効果的補強》は場面1（年確自慢）では31%、場面2（内定自慢）では17%と大きく差が現れ、自慢しやすい場面である場面1（年確自慢）のほうがか用いられやすい結果になった。このことから、語り手が自慢しやすいと判断すると、《承認の促し》が多くなるのではなく、《積極的な効果的補強》によって《承認の促し》を補強していく形で自慢談話を進めようということがわかる。

《消極的な効果的補強》は場面1（年確自慢）では17%、場面2（内定自慢）では11%現れ、自慢しやすい場面の場面1（年確自慢）のほうが多かった。自分の経験をマイナスに語る《消極的な効果的補強》は、自慢しにくい場面2（内定自慢）で多く現れると想定していた。しかし、語り手は《消極的な効果的補強》にある《承認の促し》を補強するという面を考慮し、自慢しにくい場面では用いにくかったのだと考えられる。このことから、《消極的な効果的補強》は自慢を強める働きがあるコミュニケーション機能だと言える。また、《積極的な効果的補強》よりも出現率が低いことから、自慢したい内容をマイナスに語ることは、プラスに語ることよりも語り手にとって控えたい方法である可能性がある。

《対人配慮》は、場面1（年確自慢）では9%、場面2（内定自慢）では26% 現れた。自慢しにくい場面である場面2（内定自慢）に多く現れていることから、《対人配慮》は自慢を薄めるコミュニケーション機能であると言える。しかし、自慢しやすい場面である場面1（年確自慢）でも自慢を薄めるために《対人配慮》は使用されると考えていたため、場面1（年確自慢）での出現率の低さは想定外であった。これは、自慢しやすい場面でわざわざ《対人配慮》を用いることは逆に自慢したい内容を強調し、結果として配慮的な表現として受け手に受け取られない可能性があることを語り手が考慮するからではないかと考えられる。

3.3 まとめ

自慢談話を構成する発話は《きりだし》《状況説明》《積極的な効果的補強》《消極的な効果的補強》《承認の促し》《対人配慮》の6つのコミュニケーション機能に分類することができる。

調査前の想定では、《承認の促し》、《積極的な効果的補強》が自慢を強めるコミュニケーション機能、《消極的な効果的補強》《対人配慮》が自慢を薄めるコミュニケーション機能、《状況説明》は中立的なコミュニケーション機能だとしていた。しかし、調査結果をまとめると、《承認の促し》は自慢を強めるものではなく「自慢談話」内で核となる要素であり、自慢を強めるコミュニケーション機能は《積極的な効果的補強》、《消極的な効果的補強》であり、自慢を薄めるコミュニケーション機能は《対人配慮》であることがわかった。また、語り手が《消極的な効果的補強》や《対人配慮》などで自慢したい経験を低く表現しても、場合によっては相手を配慮するものではなく、自身の体裁を保とうとしているのだと解釈される可能性があるという点も、語り手のコミュニケーション機能の選択に影響を与えていた。

4. おわりに

これまで類型化されてこなかった「自慢談話」を、依頼行為を参考に、コミュニケーション機能を用いて自慢談話の枠組みを整理することができた。今後は、この枠組みを用いて、他言語と比較していきたい。

今回の調査では、10人という限られた人数を対象に行ったため、個人の価値観や性格が全体の集計結果に影響を与えている可能性も否めない。また、調査対象者が全員関西出身であったため、出身地によって変わるコミュニケーション機能につ

いて検討できなかった。そのため、今後は日本語話者にとっての普遍的な「自慢」について考察する為に、対象の数量を増やした調査を行う必要がある。

一方、今回のように指示があるロールプレイ会話では、調査対象者は正直に自慢したい内容のありのままを伝えようとしたが、実際の自然談話の中では、事実と違う内容を伝える(例えば、第一志望の企業から内定をもらっているにも関わらず、「まだ決まっていない」と言うなど)ことで受け手に対して配慮しようとする方法も考えられる。このように、「自慢をしてもいいし、しなくてもいい」という場面ではどのような発話が見られるのか観察することで、「自慢」の実態の把握に繋がるだろう。

参考文献

- 市川真未 (2019) 「《賞賛》が「マウンティング」に作用する条件」『日本語用論学会第21回大会発表論文集』14
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション』大修館書店
- 釜田友里江 (2017) 「日本語会話における共感の仕組み—自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化研究専攻博士論文
- 熊谷智子・篠崎晃一 (2006) 「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版
- 戸江哲理 (2008) 「糸口質問連鎖」『社会言語科学』10-2
- 橋元良明 (1992) 「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」『日本語学』11-13、明治書院
- ブレイクモア, ダイアン (1994) 『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門』(武内道子・山崎英一訳) ひつじ書房
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版

(なかうち はるか/本学大学院生)